［文学 1-1］

〈パネル発表〉

フィクション論と現代日本文学
―筒井康隆・村上春樹テクストを読む―

高橋幸平（同志社女子大学）
日高佳紀（奈良教育大学）

フィクション論とは、様々な表象における〈虚構性〉のあり方を体系的に記述しようとする理論的な試みである。

本パネル発表は、村上春樹と筒井康隆のテクストを対象に、この理論をフレームワークとした分析を通じて、従来とは異なる観点からこれらを評価する。そしてそこから、フィクション論に基づいて文学表象の価値を捉えることの意義を提示したい。

高橋幸平（TAKAHASHI Kohei、同志社女子大学）は、筒井康隆「虚人たち」（1979）を取り上げる。この作品では登場人物が自らを虚構内存在として意識している。それまでSF 小説を多く発表していた筒井は、「虚人たち」で小説の〈虚構性〉そのものを問うたのである。メタフィクションの典型例とも言えるこの作品は、しかしながら同時に、現代のフィクション論の諸概念を問い直す契機に満ちてもいる。本発表では、この作品の分析を通じて〈虚構世界〉概念について考察したい。

日高佳紀（HIDAKA Yoshiki、奈良教育大学）は、村上春樹「風の歌を聴け」（1979）を取り上げる。小説を書くことそれ自体に対する自己言及が繰り返されるこの作品において、語り手／書き手の「僕」が最も影響を受けたとする作家デレク・ハートフィールドは、実在しない虚構の人物である。物語の主題の一つである書く行為の基盤そのものが虚構によって成り立つ作品なのだ。小説の枠組みと内容それぞれの虚構性が交差する地点を検討し、この物語におけるメタフィクションの構造を明らかにすることを目指す。

本パネル発表では第一に、言説の構造・内在する仕掛け・表象に顕れる効果を精緻に読み解くことを目指している。ただし、いずれも同年（1979）に発表された長編であることに焦点をあてれば、結果として〈虚構性〉に対する作家の意識の違いやその歴史性を問うことにもつながるだろう。1980 年代以降の日本文学を代表し、現在もなお多く読まれる両作家のテクストを検討することで、現代日本における〈虚構性〉の問題を考える手がかりを示すことができればと考えている。

[文学 1-2]

〈パネル発表〉

事実への欲望
——1920－30 年代の「実話」ジャンルをめぐって

久保昭博（関西学院大学）
西川貴子（同志社大学）

本パネル発表は、「実話」というジャンルをフィクション論の観点から再考することを目的とする。「実話」ジャンルへの興味は、何よりも「事実」に対するその曖昧なステイタスにある。「実話」と名付けることで「事実」であることを一方で謳いつつ、他方では「事実は小説よりも奇なり」（これは 1919 年に米国で創刊された雑誌 True Story のサブタイトルでもある）というキャッチフレーズが示すように、出来事の事実性というよりも「奇」の一種、さらに言えば「暴露的奇想」を読者は求めていたといえる。しかしなぜフィクショナルな「奇想」よりも事実とされる「奇想」のほうに人は興味を引かれるのか。あるいは物語世界がなぜ現実世界と地続きであるとみなされる方が「面白い」のか。〈事実的言説／非事実的（虚構的）言説〉という区分が、理念として要請される「真実性」や「物語的価値」とどのような関係を取り持つかという観点から「実話」を位置づけたい。具体的には、大衆文化とマスメディアの発達とともに、1920－30 年代に日本で「実話」が再発見され多数発表されたことに注目し、この時代の「実話」に焦点を合わせて考察する。

久保昭博（KUBO Akihiro、関西学院大学）は、フィクション理論の観点から事実的言説と虚構的言説の特徴をそれぞれ整理したうえで、「実話」ジャンルの問題点を明らかにする。また「実話」ジャンルをめぐり、主にこの時代の日本で書かれた言説を、西洋的リアリズムの伝統を踏まえて考察することによって、「実話」ジャンルと文学性の問題について素描することを試みる。

西川貴子（NISHIKAWA Atsuko、同志社大学）は、『文芸春秋』の「実話」欄を取り上げ、『文芸春秋』のメディア戦略と「実話」という場の機能について確認する。特に「手記」や「手紙」形式で書かれた実話に注目し、新聞報道や小説との比較のもと、「実話」におけるリアリティとは何かを考察する。大衆文化とマスメディアが発達する中で、「実話」が三面記事的な「事実」への欲望、覗き見主義的な欲望というかたちをとることを検証し、そこに一種の「実話小説的リアリズム」の素地が生ずると言えるかどうかを考えたい 。

[文学 1-3]

スキャンダル報道言説への反照
―柳原白蓮『荊棘の実』の位相

笹尾佳代（神戸女学院大学）

柳原白蓮『荊棘の実』（新潮社、1928）は、白蓮の自伝的小説と目されてきた作品である。しかし、いわゆる「白蓮事件」としてメディアを賑わした出来事をはじめとする白蓮自身をとりまく事態に目を向ける時、単に私小説的表現と見なす評価に留まらない、この小説をめぐる言説配置の特異性を見出すことができるはずである。

『荊棘の実』が発表される 7 年前の 1921 年 10 月、白蓮は、炭坑王と呼ばれていた夫・伊藤伝右衛門のもとから法学士の社会運動家・宮崎龍介のもとへと出奔した。この事件の第一報である『朝日新聞』（1921 年 10 月 22 日夕刊）紙上には、白蓮が夫に宛てた絶縁状ともいうべき手紙の全文が掲載され、その応酬として、伝右衛門からの白蓮への手紙も『毎日新聞』（10 月 24 日～28 日）紙上に公開される。まさにメディア主導で生じたスキャンダルに他ならないが、この「白蓮事件」は、社会のタブーを浮き彫りにするとともに、「因習的な婚姻」によって抑圧された女性の〈解放〉をめぐる先鋭的な議論をも引き起こしていく。ここには、メディア上でさまざまな言説を呼び込みながら展開した事件ならではの、スキャンダル言説に孕まれる両義性――個人に対する糾弾とタブーに対する問い直しの可能性――を認めることができるだろう。

また、真偽を問わずメディア上に溢れ出た言説とそれに対する通俗的関心は、華族階級出身の白蓮の生い立ちとも相俟って過熱し、やがて、菊池幽芳『白蓮紅蓮』（大阪毎日新聞、1922）や、武田豊四郎『鬼城の白蓮』（上田屋書店、1923）といった、モデル小説を登場させるまでにいたった。

本発表では、上記のような言説群を背景に描かれた『荊棘の実』を対象に、メディア上に流通したスキャンダル報道言説との距離を測定したい。そこからは、スキャンダル報道言説の被傷性に対峙する様が浮かびあがってくるはずである。また、〈真実〉のありかを求めるような読書行為の中にあって、フィクションであることはどのように働くのか。文学的コミュニケーションの場において虚構性が作用する様についても考察してみたい。こうした試みを通して、多様なメディアを通した言説が溢れ、真実のあり方までもが脅かされるという現在的問題を考えるための視座を示すことができればと考えている。

[文学 1-4]

〈事実性〉と〈フィクション性〉のはざま：
島崎藤村の自伝的小説

ホルカ・イリナ（京都大学）

島崎藤村（1872-1943）は新体詩人としてデビューを果たし、その詩作が長い間教科書に採録されつづけてきた。その一方、20 世紀初頭に散文に転じたあと、自分の経験や周りの友人・家族のプライベートを素材にした小説を数多く執筆したことでも〈悪名〉が高い。

本発表では後者のような創作におけるリアリティとフィクションの関係を問題視したい。そこではまず元文学界同人の戸川秋骨や馬場孤蝶や藤村自身をはじめ、明治 40 年代の文壇メンバーをモデルとした短編小説「並木」（1907）に焦点を当てる。「並木」の発表を契機に勃発したいわゆる「モデル問題」をめぐる緒言説を分析し、当時模索されていた「事実」と「芸術」の関係やそれぞれの価値の基準を明らかにしたい。

次に、「モデル問題」のおおよそ 10 年後に起こった「新生事件」を取り上げる。「新生事件」とは、藤村の長編自伝的小説『新生』（1918）に描かれた、主人公（＝作者の分身）とその姪の間に結ばれた男女関係を指すものであり、「事実」と「芸術」に関する議論を再燃した「事件」でもある。本考察に当たって『新生』の同時代評をはじめ、芥川龍之介「或阿呆の一生」や「侏儒の言葉」（1927）におけるコメントや、それに対する藤村自身の反応、さらに長谷川こま子（藤村の姪）が綴った「悲劇の自伝‒名作『新生』の女主人公の悲しき半生」（1937）を視野に入れる。

本発表では小説「並木」と『新生』やそれらをめぐる批評的な言説、言い換えれば自然主義・自伝的文学の生成と消費に携わる諸行為者の「対話」、あるいは場合によって「ディスコミュニケーション」を指摘し、明治末期から大正にかけて繰り広げられていたリアリティとフィクション、記述と描写などの定義を裏付ける（準）理論的な枠組みを明らかにする。

[文学 1-5]

左翼情報の流動性とジェンダー：『女人芸術』と『戦旗』

飯田祐子（名古屋大学）

メディアの中を情報は流動する。本発表では、1930 年前後の左翼情報に焦点を絞り、どのように情報が流れていたのか、雑誌のジェンダー・ポリティクスを視野にいれつつ検討したい。具体的には、『女人芸術』と『戦旗』をとりあげ、両者の間の関係性について考察する。

『女人芸術』は、長谷川時雨が主宰し 1928 年 7 月から 1932 年 6 月まで刊行された雑誌である。もともとは、文芸・芸術雑誌として出発したが、1930 年あたりから左傾化した。全期にわたって大きな特徴となっているのは、ほとんどの書き手が女性であったことである。とはいえ、それは閉鎖的、自律的な場であったわけではない。女性雑誌研究において夙に指摘されてきた濃密な読者共同体の形成は、『女人芸術』においてもその目的の一部ではあったが、他誌と比較して特徴的だと思われるのは、偏りを避ける門戸の開き方である。逆説的なようだが、それが左傾化につながったとも思われる。左傾化は、同時代の左翼思想の波を、遮ることなく受け入れた結果であった。

では、それらの情報は『女人芸術』の中をどのように流通したのか。本発表ではとくに『戦旗』との関係に注目する。『戦旗』の発刊は、『女人芸術』と同じ 1928 年である。全日本無産者芸術連盟（ナップ）の機関誌として、同時代のプロレタリア文学運動の中心的存在であった。『女人芸術』の後期には男性も執筆するようになるが、彼等の他誌での執筆状況をみると、『戦旗』の参加者が最も多い。『戦旗』そのものに言及する記事もみられ、『女人芸術』に押し寄せた左翼情報の中で、『戦旗』の発信によるものは最も多かったと思われる。その具体的な状況を明らかにしたい。また、情報の取捨選択と応答の様相を確かめることによって、左翼思想の流動におけるジェンダー・ポリティクスについて考えてみたい。

[文学 1-6]

夏目漱石『三四郎』
―新聞連載小説というメディアの力に関する考察

坂東実子（東京外国語大学非常勤講師）

本年４月、『漱石文学全注釈７　三四郎』（若草書房）が刊行された。夏目漱石の『三四郎』（1908）の初版本の本文（上段五分の二）の下に当時の事物を説明する語注および、研究状況に関するコラムを配したものである。私は、全 13 章中、第１～６章を担当した。かつて「『三四郎』に吹く<風>―明治 40 年の事物と経済」（翰林書房『漱石研究』Vol.5,1995.05）という論文を執筆して以来、関心を持ち続け、調査・研究してきた成果である。

夏目漱石『三四郎』は、1908（明治 41）年 9 月 1 日から 12 月 29 日にかけて『朝日新聞』に連載された。連載のちょうど一年前の 1907（明治 40）年特有の事物が多く書き込まれており、読者は、前年の記憶を喚起しつつ、その先、年末にかけて起きる社会の変動を知っているがゆえに、ハラハラしながら登場人物の動向を追ったと考えられる。

日本では、1908（明治 41）年に初の劇映画（無声映画）が上映され、1925（昭和元）年にラジオ放送開始、1929（昭和４）年に初のトーキー（有声）映画上映、1953（昭和 28）年に TV 放送が開始される。『三四郎』の時代は、ストーリーのあるものを楽しむメディアは限られており、新聞連載小説には、現在の「朝ドラ（NHK 朝の連続 TV 小説）」以上の影響力があったと考えられる。小説の展開が、連載を楽しみに毎日読む新聞読者たちの話題にのぼり、『三四郎』に登場したことで、「ヘリオトロープ」の香水や石鹸、「迷羊」という言葉の流行も生まれた。

今回の発表では、明治 40 年から 41 年にかけての景気の変動にあわせて、注釈作業によってさらに見つかった、「明治 40 年に盛んで、明治 41 年に廃れた事物」、「明治 40 年と 41 年の間で大きく変化した事物」を取り上げる。現代の、注釈なしで『三四郎』を読む読書体験では味わえない、注釈を通して読む当時の読者の疑似体験を通して、当時の新聞連載小説というメディアが有していた力を考察し、『三四郎』という作品がもつ魅力に迫りたい。

[文学 1-7]

明治のメディアと夢野久作

木村千佳（日本大学大学院生）

夢野久作は、大正 15 年から死没する昭和 11 年までのわずか 10 年間、作家として活躍した人物である。その奇怪な内容により読む者の精神を狂わせると言われている長編小説「ドグラ・マグラ」は、彼の代表作として有名であり、夢野久作はそのような作品を数多く執筆したというイメージが強いだろう。しかし、彼の作品の特徴はそれだけではなく、新聞、手紙、電話などのメディアを織り込んだ作品を数多く執筆し、他の作家とは異なる独特な作風を生み出したのである。

夢野久作が誕生する 20 年ほど前、日本の転換期となった明治維新が起こり、王政復古による政治体制の変容や西洋の文化が流入してきたことによる文明開化などが発生した。そして、それと同時に日本国内のメディアも急激な発展を遂げた。新聞社が続々と起業し、各地で電信整備が行われ、鉄道開拓や郵便業務の全国化も行われた。明治維新後、わずか二十年の間で発達したのである。夢野久作が育った時代は、こうして発達したメディアが人々の中に定着し始めた頃である。さらに彼は、日本政治界のフィクサーとも呼ばれた杉山茂丸を父に持ち、また、九州日報で新聞記者として働いていた経験もあることから、他よりも強く情報の発信、伝達、受信に関心を抱いていると考えられる。そして、それが、作中に織り込まれたメディアによって表されているのではないだろうか。

明治維新後の日本のメディアの急激な発達は、政治的な思惑はもちろん、当時、ロイター通信社、ヴォルフ通信社、アヴァス通信社による「世界三大協定」が結ばれ、世界中の情報が世界中を駆け巡る世の中へと変容し、その波に日本も必然的に呑まれたことによるものとも言える。メディアを扱い、発信、受信する登場人物の様子を描くことによって、夢野久作は、情報化時代の波に呑まれた日本を自身の文学に表したと考えられる。

[文学 2-1]

〈パネル発表〉

現代日本の BL 文化と古典の再評価

染谷智幸（茨城キリスト教大学）
畑中千晶（敬愛大学）

20 世紀末から日本で断続的に人気を博して来た BL（ボーイズ・ラブ）のコミックは、ここ数年で大きな文化的役割を果たすようになった。その一つは、BL が古典の世界へ踏み込み、古典を再評価する動きもたらしていることである。

例えば、2016 年 5 月～9 月、井原西鶴の『男色大鑑』(1687 年刊行）が、KADOKAWA/エンターブレインからコミカライズされ（三冊、武士編、歌舞伎若衆編、無惨編）人気を博した。このコミックの特徴は、第一線の BL 漫画家たちがこぞって参加するとともに、『男色大鑑』の気鋭の研究者である畑中千晶が分かりやすい解説を書いたように、エンターテイメントと学術世界が協同で西鶴の文学世界に迫ったことである。この動きは『男色大鑑』を長年研究してきた染谷智幸と畑中千晶の共編による『男色を描く』(勉誠出版、2017 年）に結実し、その巻頭の座談会では『男色大鑑』のコミカライズを担当した大竹直子（漫画家）とコミカライズを編集した斉藤由香里（編集者）を招いて、BL と古典の相互交流に関して多角的な検討を行った。

また、この協同作業は「二次創作」という新たな文芸的手法を浮かび上がらせることになり、小説や漫画のみならず、映画やアニメーション等を含めた広範囲のメディアの中での古典復興の可能性を覗かせつつある。

BL を始めとするこうした動きは、2017 年の秋以後も、さらに加速度的に広がりを見せ、染谷智幸を代表とする若衆文化研究会の発足（2017 年 11 月)、NHK の番組「歴史秘話ヒストリア」への大竹の『男色大鑑』のコミカライズの採用、染谷の出演（2018 年 4 月）と繋がっている。

本発表では、こうした日本での古典の再評価やアジアとの文化交流に、BL を始めとする漫画などのポップカルチャーへの熱気がどう関わってきたのかを紹介しながら、その背景を考察し問題点を洗い直してみたい。

[文学 2-2]

合巻における名所図会利用
―古典知識の受容に注目して―

有澤知世（国文学研究資料館特任助教）

近世後期に盛んに出版された名所図会は、簡便な文章と挿絵によって、様々な土地の風土についての情報だけでなく、歌枕や伝説といった古典の知識をも広く浸透させたと思われる。さらに、読本や草双紙といったような戯作において名所図会を利用している事例が多く見受けられ、当時における古典知識の受容の在り方の多様性を示す。

発表者は以前、山東京伝(1761-1816)作の合巻作品における図会ものの利用法について分析し、京伝が、素材とした作品をよく理解した上で、文・絵ともに、自身の作品の文脈に巧みに取り入れていることを指摘した（拙稿「京伝合巻と図会もの―京伝の挿絵利用方法についての一考察―」、『日本文学』第 65 巻 6 号、2016 年 6 月）。さらに、素材に創意を加えている事例について考察を行うことにより、当時、名所図会で紹介されている〈古典〉が如何に受容されていたのかについて言及したい。

本発表では、山東京伝作『妹背山長柄文台』(1812 刊)等、合巻作品において名所図会が利用されている例を取り上げ、その方法について論じる。

[文学 2-3]

近世文学の周縁部
―鈴木牧之の『秋山紀行』をめぐって―

シェーク・タリク（英語外国語大学）

江戸時代を理解するには三都の江戸、京都、大阪から遠く離れた地方の商人たちの芸術的や文化的な分野への貢献を理解しなければならない。越後国の商人、随筆家、俳人の鈴木牧之はそういう地方のエリートを代表する人物として考えられる。近世の中心と周辺の関係、そして牧之などの地方の文人にその関係が与えた影響を把握するには牧之の作品は非常に重要な文献である。

江戸時代後期の越後の豪農であった鈴木牧之が越後の豪雪の中の生活を『北越雪譜』という本で描写している。1837 年に出版されたこの『北越雪譜』が当時大ベストセラーになり、今日も鈴木牧之の代表作として愛読されている。『北越雪譜』の出版には 40 年もかかったが、その間に鈴木牧之は十返舎一九に依頼を受けて『秋山紀行』という本も書いている。越後と信濃の境目に位置する秋山郷を文政 11 年に訪問し、旅の記録をまとめた本である。『北越雪譜』が大ベストセラーになったすぐ後、十返舎一九という達人の指導の下で『秋山紀行』が出版されることになっていたが、出版できる前に鈴木牧之が没し、江戸時代には出版されなかった。

『北越雪譜』で鈴木牧之は越後に旅行に来た文人によって書かれた旅行者文学を批判しているが、『秋山紀行』の場合は鈴木牧之が旅行者として書いている。古くから旅行者文学では雪が花に例えられたり、雪国について間違った情報や描写が伝われたりしてきた、と『北越雪譜』で牧之が批判している。『秋山紀行』で牧之が社会科学のフィールドワークのメモのような客観的な書き方をしているのは、『北越雪譜』で旅行者文学を批判していることの影響であろう。しかし、旅行者文学の欠点が『秋山紀行』では全く現れないと言えるのであろうか。近世日本の大都会と地方、つまり中心と周辺の関係の中でも、周辺の中により周縁化された周辺が出てくる『秋山紀行』を分析していきたい。

[文学 2-4]

『源氏物語』少女巻の風に吹かれる竹

瓦井裕子（就実大学）

本発表は、『源氏物語』少女巻に見える「風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに」という表現をめぐって、古来指摘されてきた白詩引用を再検討し、〈風に吹かれる竹〉をめぐる和歌史の状況を勘案しながら、新たな解釈を目指すものである。
『源氏物語』少女巻において、内大臣は娘・雲居雁と甥・夕霧の恋を知り、これを阻止するため雲居雁を自邸に引き取ろうとする。夕霧は雲居雁の部屋に入ることもできず夜中その入口に寄りかかっていると、雲居雁も目を覚まし、竹に吹きわたる風の音、雁の鳴き声を聞いてひとり物思いに沈む。

古注以来、この風が竹に吹きわたる「風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに」という表現には、白詩「贈　二駕部呉郎中七兄　一」の一節「風生　レ竹夜窓間臥」の引用が指摘されている。しかし、この白詩は閑居を主題とするもので、当該場面の状況とは主題・季節・時刻が一致しないとの指摘があり、新たな解釈も提示されている（注 1）。

〈風に吹かれる竹〉について和歌史を紐解くと、日本においては白詩など漢詩の影響を受けながら早くから詠まれるが、現存する例はかなり限られており、必ずしも一般的な表現ではなかったと推測される。しかし、平安中期、10 世紀末から 11 世紀初頭にかけてのごく一時期には用例が散見され、しかもそれは宮廷女房という『源氏物語』作者に近い人物にのみ確認される。さらに、彼女たちが〈風に吹かれる竹〉を恋愛の文脈で用いていることも、『源氏物語』と関わって注目すべき事象である。少女巻の当該場面も、白詩とは一旦切り離し、当時の和歌の状況を勘案して恋愛の文脈でとらえ直される必要があるのではないか。本発表では、『源氏物語』成立当時の和歌、特に『源氏物語』作者周辺の宮廷女房たちの和歌における文脈を用いながら、少女巻の風に吹かれる竹の新たな解釈を試みたい。

（注 1）古瀬雅義「雲居雁が聞いた音――「風の音・竹のそよめき・雁の声」――」(『古代中世国文学』第 23 巻　平成 19 年 3 月）

[文学 2-5]

近代文学における「社会講談」
―堺利彦の「桃太郎」を中心に―

ケオフォンランシィー・ペンポーン（大阪大学大学院生）

日本の近代文学の中には、「講談」を素材にした作品が少なくない。実際には、「講談」は近代文学と強い繋がりがあるにもかかわらず、従来の文学研究では「講談」自体の評価が低かったため、近代文学と「講談」に関わる研究がほとんどない状態である。

本研究は「講談」の中でも「社会講談」と呼ばれるものに注目したものである。本発表は、単なる「講談」から「社会講談」が誕生するまでの経緯を明確にすること、そして「社会講談」の中でも堺利彦の「桃太郎」に注目し、その特徴を明確化することを目的とするものである。辞書や先行研究などを使用し、全体的な流れをまとめると同時に、堺利彦の「桃太郎」の構成やキャラクター、テーマなどについて、その特徴を明らかにする。以下、発表の概要を述べる。

まずは、「講談」から「社会講談」ができるまでの経緯について述べよう。「講談」は中世に成立した語り物の文芸で、鎌倉時代から室町時代にかけて発生した「説経節」が起源だと言われ、歴史物語を語る「太平記読み」という話芸に変化して江戸時代も続いた話芸である。明治 20 年代後半からは「講談」が速記本の形で出版され、多くの人に親しまれた。しかし、明治 44 年に創刊した「講談倶楽部」による講釈師との原稿提供中止の問題で若手作家たちに「講談」を書かせて、主に書き物としての「新講談」というジャンルが誕生した。そして大正 9 年、社会主義思想を取り込んだ「社会講談」が誕生したのである。

次に「社会講談」の代表作である、堺利彦の「桃太郎」について述べる。構造を分析した結果、元となる昔話とあまり違いは見当たらない。それに対し、場面と登場人物に工夫が見られた。場面は鬼が嶽という山で、桃太郎たちと鬼たちは一緒に暮らしている。つまり、鬼は近くにいる存在であり、桃太郎は直接の被害者で、鬼たちにお金や米や寶などを奪われた人物として描かれている。テーマは昔話と同じ「自業自得」というイメージはあるものの、敵討ちが強調されているわけではない。この作品に見られた桃太郎たちの貧乏な姿と、お金などを奪う鬼姿と桃太郎と家来たちとの団体姿の背景には、当然のことながら当時の社会思想の影響が見られる。「社会講談」は講談社の新しい試みとして、従来の形式や思想を改造しようとするものであり、当時に盛んに叫ばれていた社会改造を推進する目的で作られたものだったと考えられる。また、文学史的には、こうした「社会講談」は、後のプロレタリア文学へと続くものとして位置付けられると思われる。

[文学 3-1]

北京時代の林房雄と『香妃の妹』(1946):
日本占領期の北京における現地日本語メディア『東亜新報』を手がかりに

彭雨新（大阪大学大学院生）

林房雄は 1937 年、従軍作家として中国戦場に赴き、1941 年から、満州国及び中国の日本占領地に往来し、とりわけ 1943 年 1 月から 5 月、日本文学報国会の北京派遣員として北京の文化界と盛んに交流を行った。敗戦直後、林が小説集『香妃の妹』(後藤書店,1946.12)を出版し、中に収録されている「香妃の妹」、「北京の壷」二篇は占領下の北京を舞台とされている。1948 年、林は日中戦争への協力により、文筆家として公職追放されたため、彼が戦時中を語る資料がほとんど残されておらず、日中両国にも林房雄と日中戦争に注目する先行研究が極めて少ない。本稿では、新しく発見された日本占領下の北京で発行された現地日本語メディア『東亜新報』を用い、1943 年における林房雄の北京での活動を再整理するうえで、短篇小説「香妃の妹」、「北京の壷」との関係を検討する。

「香妃の妹」は日本から北京に派遣されている記者藤野と北京の妓女小美玉（香妃というもう一人の妓女の妹）との恋愛物語である。小説における時間・場所の推移は、1943 年における林房雄の北京・上海行とほぼ一致するため、自伝的要素がうかがえる。また、同時期の『東亜新報』には、中国の歴史人物「香妃」をめぐる連載記事が見られるため、それが北京滞在中の林房雄に創作のインスピレーションを与えた可能性を検討する。

次の「北京の壷」は、北京の天壇で写生し終わった水原画伯が、昔の美術家の同人笹本五郎と北京の酒場で出会い、過去と現在を語り合う話である。主人公水原のモデルは明らかに梅原龍三郎であり、梅原とその絵は「香妃の妹」でも言及されている。これまで、林と梅原の交流について注目する研究が見当たらないため、本稿では、梅原龍三郎「北京日記」(1940)などの資料を用い、戦前における梅原の 6 回の北京行を整理し、林房雄との接点を探り、占領下北京における二人の日本人画家・文学者の交流を考察したい。

林房雄は戦時中において多くの日中文化人と交流があり、日本占領期の北京文壇に大きな影響を与えた人物である。彼の北京時代の活動と関連作品を明らかにすることは、戦時中の日中文学交流史研究には大きな意義があると思われる。

[文学 3-2]

日本語雑誌『民俗台湾』にみる〈日本人〉の境界と日本語文学の臨界

荘千慧（大阪大学特任研究員）

日本領台後、台湾訪問後に台湾を題材にした文学作品を発表した日本人作家はしばしば見られる。特に 1930 年代以降になると佐藤春夫の『霧社』（1936）などのように、台湾を訪問した経験に基づいた作品が多く出てきた。一方、台湾在住の在台日本人でも類似する動きがあり、当時の台湾文壇に影響力のある日本語雑誌『文芸台湾』の主宰である西川満や台北帝国大学教授の島田謹二をはじめ、日台文学の融合を提唱する言論が見られるようになった。ただし、前者は同化政策との関わりが緊密であったのに対し、長年台湾に在住している在台日本人作家らの動きは彼らの郷土意識と関連していた。

本発表で取り上げるのは、戦前の日本側の視点による台湾民俗学研究史において重要視されてきた、日本語雑誌『民俗台湾』(1941/7－1945/1)である。その雑誌を手掛けたのは 7 歳に台湾に移住した池田敏雄(1916－1981)である。当誌はこれまでに、台湾の風土を台湾人と共に採取したことで、民俗学の場面で論じられてきたが、日・台の作者によった数多くの文芸作品が掲載されたのにもかかわらず、植民地文学としての位置付けは看過されていた。申請者が拙稿「一九四〇年代の在台日本人の郷土意識―池田敏雄の台湾民話を例として―」(『日本文学』2015.9）に指摘したように、当誌の実質の編集者である池田が台湾人女性の筆名で発表した民話は、歴史状況の葛藤の現場によったものとして再評価すべきものである。

本発表では、池田主宰の『民俗台湾』と同時代において重要な文芸雑誌である『文芸台湾』との異質性を検討し、当誌の日本人執筆者におけるナショナル・アイデンティティーを考察する。大東亜戦争が勃発した 1940 年代において、「内台融合」が叫ばれた時代の中で、当誌に掲載された文芸作品を日台の文化的交渉の錯綜を具体的に示すものとして、新たな読みの可能性考える。

[文学 3-3]

山崎豊子『二つの祖国』に描かれた日系アメリカ人

徳永光展（福岡工業大学）

第二次世界大戦戦局悪化の中で、アメリカの強制収容所における日本人の扱いは厳しさを増していった。その中で日本人の取るべき態度とは、チャーリー田宮のように本音を押し殺して白人たちに取り入る姿勢と、天羽賢治の父・乙七のように日本人としての振る舞いにこだわる姿勢を対極として、揺れ動いていた。日本での生活体験のない賢治の妻・恵美子も、白人社会で無難に生きるには賢治のようなこだわりは却って邪魔になるという見方を示していたが、賢治にしてみれば最も自らの内面を理解してもらいたい妻に分かってもらえない結果には距離感を覚えていった。日本では幼少期から大東大学まで教育を受けはしたが、失恋に端を発するアメリカへの帰国と恵まれなかった就職、その後はロサンゼルスで発刊されていた日本語新聞「加州新報」の記者となって日系人の心を鼓舞する記事を次々と執筆したものの、結局は日系人の強制収容所入り政策の波にのまれてしまい、収容所におけるインフォメーション・デスク勤務、収容所から出てアメリカ軍の語学兵養成のための日本語教官、軍曹入り、弟・忠との太平洋戦線での再会と狙撃、終戦後の来日とアメリカ側の立場に立って行動するよう余儀なくされた賢治がチャーリーと離婚した井本椰子に惹かれていくのは、日本を知っていた者同士として通じるものがあったからに他ならない。作品に登場する日系二世は外見こそ日本人だがメンタリティーはアメリカ人でなければならないという心理的抑圧を体験していた。日本人としての自覚を濃厚に持つ一世や、アメリカで生まれ、アメリカで教育を受けることでアメリカ人としてのメンタリティーを信じきっている三世と比較すれば、二世という立場にあっては、日本滞在の履歴とそこでの体験の好悪次第で日本へのこだわりを持つグループと日本を切り捨てようとする人々に分化していくという事実に辿り着くのである。

[文学 3-4]

アンコールの影像
―三島由紀夫『癩王のテラス』―

久保田裕子（福岡教育大学）

三島由紀夫の『癩王のテラス』は、12 世紀末のカンボジアの王ジャヤ・ヴァルマン 7 世をモデルとした戯曲で、雑誌「海」(1969 年 7 月)に発表された。(1969 年 7 月 4 日から 30 日まで、劇団雲・浪曼劇場により、帝国劇場で初演)。占城（チャンパ）王国を征服して凱旋した王は仏へ感謝するために寺院建立を命じるが、その日に王の肉体に病の兆候が表れる。王の病が悪化するにつれ、壮大なバイヨン寺院が完成する。最後にただ一人、バイヨンと対面する王の前に、若々しい「肉体」が現れ、「精神」に対して不滅を宣言する。本作では神聖な王の肉体が崩壊する過程と、バイヨンが完成する過程が重ね合わされているが、「肉体」と「精神」をめぐるドラマツルギーの対立が、演劇的な視覚表現を通して展開していく。

三島は 1965 年 10 月にタイを訪れた後、本作の取材のためにカンボジアを訪問し、アンコール・トムで取材を行った。1960 年代に、三島はタイ、ラオス、カンボジアを訪れ、現地踏査を行ってさまざまな作品を執筆している。インドシナ半島に赴いて取材し、作品を執筆している作家として、三島は同時代の日本文学において特異な存在であったと言える。1960 年代以降の三島は、天皇の問題と対峙した作品を発表していくが、同時期に本作のようにアジアの王権を背景にして描かれた作品があることにも注目したい。本作は舞台となった場所の歴史を踏まえながら、同時に 1960 年代における三島の問題を反映している点で重要な作品であるが、従来の研究史においては、『豊饒の海』との関連は指摘されていたが、作品自体の考察は十分なされてこなかった。本発表では、『癩王のテラス』において背景となったジャヤ・ヴァルマン 7 世の伝説を踏まえながら、王の病を通して二元的に表象された「精神」と「肉体」をめぐる問題について考察する予定である。

[文学 3-5]

翻訳されたタイ表象
―モームの「九月姫とウグイス」(1922)と光吉夏弥の翻訳(1954) ―

橋本順光（大阪大学）

『九月姫とナイチンゲール(Princess September and the Nightingale)』(1922)は、サマセット・モームが残した唯一の童話である。彼の『客室の紳士(Gentleman in the Parlour)』(1930)によれば、1922 年 11 月のバンコクに、オリエンタル・ホテルの一室でマラリアに苦しみ、酷暑と喧噪を呪いながら病み上がりのぼんやりとした頭で書き上げたのだという。この童話はタイの宮殿を舞台としているが、病気のためモームは実際に見学してはいない。宮廷やタイへの無理解と偏見が散見されるのはそのためと考えられよう。

しかし、『九月姫とナイチンゲール』は、主権回復まもない日本で、教育への希望を教える民主的な「岩波の子どもの本」シリーズの一冊として翻訳された。訳者の光吉夏弥は、1953 年から始まるこのシリーズで、石井桃子と共に中心的な役割を果たした一人である。挿絵を担当した武井武雄も、戦前の『コドモノクニ』で自由で大胆な絵を発表し続けた人気画家だった。『九月姫とナイチンゲール』は、最初、前述の『客室の紳士』に収録されたが、1939 年には、Richard C. Jones の挿絵とともに、一冊の絵本として出版された。光吉は、おそらくこの絵本を翻訳したと考えられる。

本発表では、ほとんど論じられることのない『九月姫とナイチンゲール』について、三つの作業を通して、そのタイ表象の翻訳と意義とを考えてみたい。第一に、適宜、アンデルセンの『ナイチンゲール』(1843)を参照することで、この童話が西欧に典型的なナイチンゲール＝芸術家という隠喩の伝統にのっとっていることを確認する。第二に、こうしたナイチンゲールの隠喩にモーム自身が極めて自覚的だった傍証として、本作が大英帝国博覧会(1924)のドールズハウス内で展示された文脈に注目したい。第三に、これらの経緯と無関係に翻訳されたと思われる『九月姫とナイチンゲール』が、ナイチンゲール＝芸術家だけでなく、いわば九月姫＝読者と見立てることで、原作よりも踏み込んだ形で民主化への希望の物語へと翻案している可能性を指摘したい。

[文学 3-6]

ペン部隊の一員としての林芙美子が見た中国人
―『戦線』と『北岸部隊』を中心に―

何問民（大阪大学大学院生）

1937 年、盧溝橋事件が起こり、日本は華北への侵略を本格化した。1938 年 8 月 27 日、林芙美子を含め、選ばれた 22 名の作家が発表され、「ベン部隊」が結成された。同年 9 月からペン部隊陸軍班の唯一の女性として林芙美子は活躍し、ペン部隊漢口一番乗りになった。その時、林は『戦線』と『北岸部隊』という二つの従軍記を創作した。先行研究では、従軍記における中国の描写、特に中国兵の死体に関する描写がよく取り上げられているが、それは林芙美子の戦争観や戦時下の心理、または従軍記の特徴などを説明するための証拠としてのみ使われている。そこで、本発表は、中国の戦場での経験を書いた『戦線』と『北岸部隊』という二つの従軍記から、林がとらえた中国人のイメージを具象化したい。

まず、林芙美子の人生経歴と歴史背景を紹介する。それから、林芙美子の従軍動機と具体的な従軍活動を明らかにする。8 月 25 日の朝日新聞朝刊に寄稿した文章から、林はその従軍で創作のための新たな素材を得られると思っていたのではないかと推測できる。吉屋信子に対する競争意識も林芙美子が従軍を希望した理由の一つであり、もう一つの動機は時代の流れと一緒に進もうとする考えあるいは野心である。ペン部隊の一員として、林は 1938 年 9 月 19 日から行動を始め、上海へ到着してから、最前線の部隊と合流し漢口に入城するまでの約一ヶ月半、従軍した。元々陸軍稲荷部隊と共に進軍していた林は、朝日新聞社のトラックに乗り換え、最後に報道記者としてペン部隊漢口一番乗りになった。

また、『戦線』と『北岸部隊』という二つの従軍記における中国に関する描写を取り上げ、具体的に分析して、両作を比較する。煽動的な『戦線』に対して、『北岸部隊』は林の従軍の日常と自らの気持ち（虚無感など）をたくさん書いており、『戦線』に透けて見える中国（人）に対する好意（同情）がよりくっきり浮かび上がっていることを示す。火野葦平の解説文により従軍記に対する規制を明らかにする。その中には、中国兵は嫌らしく敵であること以外に人間としての特性を書いてはいけない、というものがある。しかし、林の従軍記の中では、中国兵の死に感傷を感じたという描写があったりする。また、直接規制に反しているわけではないが、中国人の庶民に好意を表す描写は数多く書かれている。子供から老婆まで、たくさんの庶民を書いており、さらに好意も表している。林は規制に反するような、中国人に対する好意的な叙述をしたということを浮き彫りにする。

林が中国（人）に好意的な記述をした理由を考えるために、林の戦前の中国体験をさぐる。林芙美子は戦争の前に、中国に 4 回行っている。中国旅行に関係する自伝的小説『一

人の生涯』からは、従軍する前、林は中国及び中国人に対する憧れを抱き、現実の中国の良くないところを見ても、中国に相当な好意を持っていたことが読み取れる。従軍記において中国人の庶民、さらに中国兵にも好意を持った叙述をした理由は、戦前の好意が継続しているものであると考えられる。

[文学 3-7]

林芙美子の文学における多文化共生の思想

山下聖美（日本大学）

『放浪記』や『浮雲』で知られる作家・林芙美子（一九〇三～一九五一）は、戦前、戦中、戦後を通して、東南アジア諸地域、中国大陸、台湾、ロシア、ヨーロッパなど、多くの国を訪れ、自らを「コスモポリタン」と称していた。世界の中でたくましく生き抜き、異文化を吸収し、作品へと昇華していった彼女の文学には「多文化共生」の思想がうかがえる。本発表では、具体的に、作品「西伯利亜の三等列車」や「樺太への旅」を取り上げながら、林芙美子が描いた「多文化共生」について紹介し、多様性という豊かさを認める、彼女独特の文学的なまなざしを明らかにしていきたい。

「西伯利亜の三等列車」（「改造」一九三二年二月号）は、一九三一年のシベリア横断からヨーロッパへと渡った旅をもとに描いたものである。シベリア鉄道の旅を行った当時の女性作家たちと決定的に異なる点は、「三等車」に乗り、庶民のまなざしで、貧しくとも懸命に生きる、多種多様な人々を描いたことにある。これは、代表作『放浪記』から続く作家・林芙美子の特徴である。

「樺太への旅」（「文藝」一九三四年八月号）は、一九三四年の北海道と樺太への旅をもとにしたエッセイである。ギリヤークなどの先住民族、ロシア人、朝鮮民族などが居住する多文化共生の地・樺太について、芙美子ならではの視点で描いている。

　両作品からわかることは、芙美子の視線の先にいる人間は、つねに名前のあるひとりの個人であるということだ。どのような民族であろうと、生活するひとりの個人であることに変わりはない。そのまなざしは、異なる民族の人々の間に違いを見出し、珍しがったり批判したりするような、窮屈なものではない。すなわち、差異を厳しく指摘し、区分するものではない。林芙美子のまなざしは、そもそも民族間に限らず人間はすべて同じではない別々の個人である、という前提のもとに、異なるものを包み込む共通点を見出していこうとする、大きなものなのである。その際に、見出していく共通点は「食」であることが多い。異なる個人たちが生を営み、ときに惹かれあい、ときに争いながらも、「食っていくこと」に人間本来の共通する姿があるということが、林芙美子独特の人間観であり文学観であった。

[文学 3-8]

巖谷小波の児童文学の出発点
―“Über japanische Volksmärchen”（1902）を中心に―

ベーケー・リサ・マリア・サラ・アンナ（大阪大学大学院生）

日本児童文学の開拓者・巖谷小波（1870-1933）は『桃太郎主義の教育』（1915 年）をはじめ、彼の児童文学への考え方を知りうる資料を数多く残している。その内の一つが“Über japanische Volksmärchen”（「日本の民間説話」）と題したドイツ語原稿である。これは 2 年弱滞在したドイツから帰朝する直前の、1902 年 6 月 27 日に開催された和独会の演説会で、日本の民間説話について紹介した際のもので、邦訳がないためか、管見の限りでは今までの研究で取り上げられてこなかったようである。

ここで言う「メルヘン」とは、グリム童話のように、民間説話（Volksmärchen）をもとにそれを読みやすく編集し、創作が加えられたもの（Kunstmärchen）を指すが、小波は日本で「メルヘン」の価値が認められるようになったのが 1890 年代ごろからで、その翻訳が盛んに行われるようになったとする一方で、日本の民間説話にも「メルヘン」として成立する要素が内在しているとし、それを生かした創作（neu bearbeitete Märchen）の必要性を強調する。とは言え、原稿内で紹介された『猿と蟹』(『猿蟹合戦』として広く知られている）では、実際の原話とは異なり、「敵討ち」の結末に変更が加えられているのである。そこで、本発表では、この小論を中心として、『かち／＼山狸記念碑』など 1890 年代に改作されたものとも対比しながら、滞独中に「メルヘン」に数多く触れ、影響されたと考えられる当時の小波の児童文学に対する考え方、特に、日本の民間説話にしばしば表れる「敵討ち」という、ともすれば近代性を問われかねないモチーフに対する彼の意識とその対処について明らかにする。

[文学 3-9]

尾崎翠『第七官界彷徨』における「第七官界」について

野中咲希（日本大学大学院生）

尾崎翠は（1896 年～1971 年）は、執筆期間は長くないものの、独特の世界観を持つ作品を残し、少女小説の先駆けとも言われる女性作家だ。小学校教員の父と浄土真宗の寺西法寺住職の三女の母を持つ。尾崎翠は鳥取県で生まれ育ち、執筆に本腰を入れるために 1917 年に上京した。その後、1932 年にミグレニン中毒のため兄に連れられて帰郷するまで、筆を置くことはなかった。帰郷後には、地元新聞などに寄稿するものの、作品を残すことなく、74 歳でこの世を去るまで故郷鳥取で暮らしている。近代になると再評価が進み、1998 年に代表作『第七官界彷徨』が映画化、2002 年には筑摩文庫から上下巻で小説や書簡などがまとめられた。

尾崎翠の上京時代、1930 年ごろから執筆が始まったと言われている代表作『第七官界彷徨』は、生前に唯一単行本化された作品でもある。本作を読み進めていくと、様々な数字が登場する。まず目につくのが、タイトルの「第七官界」だ。不思議な響きを持つこの言葉は、辞書で引いても出てくることはない。尾崎翠オリジナルの言葉と考えられ、言葉の意味するところが作中で細かく語られることもないのだ。今日まで様々な解釈が成されてきた。主人公町子は作中で「私はひとつ、人間の第七官にひびくような詩を書いてやりましょう」（『第七官界彷徨』2009・河出書房新社・p10）と述べ、この第七官に響く詩を書かんとしていることが伺える。物語の主軸になっているのだ。このように、「第七官界」という言葉は、尾崎翠作品を読み解いていく上で大変重要なキーワドであることは間違いない。本発表では、作中に「第七官とは二つ以上の感覚がかさなってよびおこすこの哀愁ではないか」（同・p38）とあることや、主人公が冒頭部でひとつの恋をしたと独白することなどから、「第七官界」という言葉に特に注目し、この不思議な言葉が恋愛になりきらない憧れなどであったと解釈し、提示していくつもりである。